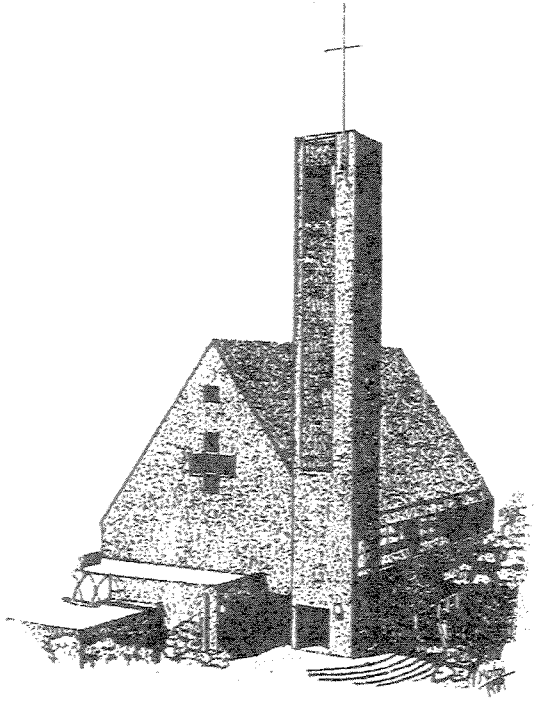
チャペル ブックレット No.11

ANNIVERSARY 40th 1964 2004

天と地のひびき

—バッハとモーツァルトの生涯と作品—

ドイツ文学者
小塩　節



名古屋学院大学　宗教部

小塩　節　氏
ドイツ文学者

1931年生まれ、東京大学独文科卒業、ケルン大学名誉文学博士。中央大学名誉博士。駐ドイツ日本大使館公使、ケルン日本文化会館長など要職を歴任。前フェリス女学院院長。
著書『ドイツ名作の旅』『木々を渡る風』『バルラハ、神と人を求めた芸術家』『天と地のひびき、ヨーロッパ音楽家紀行』など多数。
長年、ひこばえ幼稚園園長として幼児教育に携わり、現在も毎朝、園児を迎えに園庭に立ち、すべての園児と挨拶をかわす。

天と地のひびき

—バッハとモーツァルトの生涯と作品—

10年……20年という年月が非常に早く過ぎ去ってまいります。特に音楽の領域では20年前の音楽を覚えているというのは余程のことがないかぎり難しいことではないでしょうか。ところが今日私はなんと250年前のバッハと200年前のモーツァルト、このふたりをとりあげてお話したいと思うのです。もちろん他にもたくさん、まるで空の星のように優れた音楽家がいます。また音楽以外の芸術家が、また文学者が、科学者が、そしてまた名もなき人々がそれぞれ地上に与えられた人生を一生懸命まっとうしたのですが、今日はたったふたりしかとりあげてお話しすることができません。ふたりの人間がこの地上に生を受けて一生懸命生きた証し、それが天と地に響く音楽となったということをお話したいと思うのです。

私は専門がドイツ文学です。音楽は専門外ですので、ちょっと的外れなことを申し上げるかもしれません。それにいつものことですが、多少横道にそれるかもしれません。どうぞお許しください。

♪

さて250年前と申しましたが厳密には253年前、1750年ヨハン・ゼバスティアン・バッハはこの世を去りました。ヨハン・ゼバスティアン・バッハが生まれましたところはドイツの東の方アイゼナハという小さな町です。ドイツの地図を思い出してください。だいたい六角形ですね。その右の方が旧東ドイツ、その中の大きい町はドレスデン、ライプチヒがあります。アイゼナハはそのライプチヒから少し西の方で、ドイツの真ん中、大都市のフランクフルトから汽車で２時間くらい、アウトバーンを車でふっとばしても１時間半から２時間かかります。彼はそのアイゼナハの音楽家という職人の一族に生まれました。

ベートーヴェン、ブラームスとならんでドイツ音楽

の三大Bといわれたバッハはまるで大きな川のような存在でした。それはそれまでの音楽家の流れをすべて飲み込み、集大成して巨大な川となり、そこから新しい音楽に影響を与えながらゆったりと流れていくという偉大な音楽家であるという意味です。しかし面白いことにバッハという言葉のドイツ語の意味は小さな流れ、小川なのです。名は体を表わすといいますがバッハにはそれは当てはまりません。

♪

さて、バッハの生まれましたこのアイゼナハはたいへん古い町です。その町はずれの高い山にお城がありますが、名をワルトブルク城といいまして、そこでよく歌合戦がありました。それは13世紀、1250年頃のことです。歌合戦といいますのは騎士が自分で作った歌詞、自分で作った曲を携えて、色々な諸侯のところを歩いてまわり、そこでそのできばえを競い合う戦いなのです。騎士ですから剣も持っているでしょうけれど、使う道具は竪琴です。今でいうシングソングライターですね。これを吟遊騎士歌人といいます。ワルトブルク城の大広間ではさかんに歌合戦が行われました。そこで優勝したひとりがタンホイザーです。ワグナーの楽劇の主人公になっていますね。

♪

時代はくだって16世紀、そのワルトブルク城に宗教改革者マルティン・ルターが匿われたという事件がありました。彼は宗教改革を起こしたために教会から破門になります。現代は教会からの破門なんてたいした問題にはなりませんが、当時はたいへんなことでした。日本で言えば江戸時代にお寺から破門になって名前が消されるというようなものでしょうか。ヨーロッパの中世で、特に宗教者として教会から破門されるということはたいへんなことでした。でもルターは破門にあって国外追放されるはずのところ、意気揚々と自分の故郷に帰っていくところを捕まえられまして……という名目でこのワルトブルク城に匿われたのです。

そしてルターはそこで新約聖書をドイツ語へ翻訳したのです。ある日、ワルトブルク城の一部屋で、翻訳をしていましたルターの前に悪魔が出てきたというのです。それで彼が悪魔に向かってインク瓶を投げつけたときに飛び散ってできたインクの跡が今も残っているというのです。私が行きましたとき、そう言われて、私は近眼ですので壁に目を近づけて見ました。そこはへこんでいるのですよ。私がじっと見ていますと、お城の管理人が恭しく「あまり強く投げつけたので瓶の当たったところがへこんだのです」というのです。これは嘘です。観光客がそのインクの跡を「記念に」ナイフで削って持って帰るのです。それでへこんでいるのですよ。この町も1989年まで共産党の管理下にありました。インクの跡が消えてしまっては数少ない大切な観光名所が台無しです。そこでインクが消えかかるとまだインクを付けていたのです。そればかりかナイフで削られると壁ごと新しく換えたりしたそうです。

♪

こんな古い、由緒のある町でバッハは生まれ幼少期を過ごしました。彼の生まれた家はもう今はないようです。バッハハウスというのがありますが、正確に生家ではなく、近くの家を記念館にしているようです。アイゼナハの駅を降りまして…だいたいヨーロッパの駅は町の真ん中にあるのではなく、端っこ、もしくは少し離れたところにあります。たとえばパリでもロンドンでも駅は中心部から遠いですね。ヨーロッパでは町の輪郭が石で作り上げられているところに鉄道を引きました。石でできているので中に鉄道を入れにくいというのも駅が町の外にあるひとつの理由ですが、馬車時代が長かったので、馬車の駅というのは…臭うのですよ…それで遠くにあるのです。その馬車の駅をそのまま鉄道の駅にしたので、今も駅は町の中心部から離れていることが多いのです。

アイゼナハ駅もやはり町から少し離れたところにあります。駅を出て町の中に入っていきますとまずニコライ教会の前の広場にはルターの像が厳しく立っています。どんどん歩いていきますと、町の中央部にゲオ

ルク教会がそのずんぐりむっくりした姿をみせます。この教会でバッハは生まれて二日後に洗礼を受け、少年時代を過ごしました。かつてマルティン・ルターは破門されていたにもかかわらず、日曜日には山の上のお城から降りてきてこの教会で説教していたようです。もう少し歩いていきますと白い壁の家があって、そこがルターが少年時代を過ごしたという家です。そこを左に曲がって200ｍほど行くとバッハハウスがあります。いらしたことのない方は想像してくださいね。バッハハウスはクリーム色の壁のかわいい二階建てで、庭にはバッハの頃からといわれるブドウやリンゴがあります。バラもいっぱい咲いています。私が春に行きましたときはレンギョウの花がいっぱいでしたね。レンギョウっておばあさんが腰を折って笑いころげているような花でしょ？そのはずれには大きな菩提樹があり、その陰にバッハの傲岸不遜ともいえる銅像が立っています。

しかしバッハにも青年時代があって、――あたりまえですが――近くのアルンシュタットという町には青年時代のバッハの像があります。その町でバッハはオルガニストとしてのキャリアを始めるのですが、その教会…現代はバッハ教会という名前になっていますが当時は新教会という名で呼ばれていました…その近くの広場にあるバッハの像は1985年にバッハ生誕300年を記念して建てられたものですが、のびやかな手足をもったさわやかな青年バッハ像です。これをオルガンを弾いている姿だという人もいますが、手足をいっぱいに伸ばした姿から見るとどうも違うような気がします。なぜなら当時のオルガンの鍵盤の位置、ペダルの位置から考えるとオルガニストは背をまっすぐ立ててオルガンを弾かなければならなかったはずなのですが…。

バッハはこのアイゼナハ、ゲオルク教会付属のラテン語学校――ここはかつてルターも学んだ学校ですが、ここでラテン語と宗教を学びます。ところが彼が10歳になる前に父親が亡くなり、やはり音楽家であったお兄さんに引き取られ、お兄さんの庇護の下で勉強しま

す。小さい時からオルガンが好きで好きでたまらなかったバッハがお兄さんの許しを得てオルガンが弾けた時の喜びは如何ばかりだったでしょう。そして自活を考えなければならなかったバッハはリューネブルグのミカエル教会の少年合唱隊に入ります。そこでは学費が免除されるばかりでなく、少しばかりの報酬が支払われました。ミカエル教会付属学校のカリキュラムは多彩でまるで大学並みでした。そして何より北ドイツでも指折りの音楽図書館を備えていて、少年バッハの興味を満足させることのできる素晴らしい場所でした。

ヨーロッパの音楽の歴史を考えてみますと宮廷の音楽、大衆の音楽のほかに教会音楽はとても大きな分野です。教会は付属の音楽学校や寮をもっていて、ここに入ってスカラシップをもらって勉強するというのが音楽家の良い道のりでありました。たとえばハイドンがそうです。シューベルトもウィーンのシュテファン大聖堂の付属学校にいました。ただしその少年たちは声変わりの時期がくると容赦なく追い出されてしまうという過酷な条件がついていましたが。バッハもまたそこでたくさんの勉強をすることができ、彼は特別、変声期を迎えた後も楽器奏者として残ることを許されました。

♪

バッハの生い立ちについてもうこれ以上は申しませんが、ここでドイツのクリスマスのお話をしたいと思います。私たちはもうすぐアドヴェントを迎えます。アドヴェントは日本語では待降節と言って、クリスマスの前、キリストの降誕を待つ四週間を指しています。その期間にクリスマスのためのいろいろな準備をするのです。アドヴェントクランツをご存じでしょうか。モミやヒイラギの枝などで輪を作り、それを台にしてろうそくを四本立て、一週間に一本ずつ灯をつけていきます。灯のついたろうそくが四本になるとクリスマスがやってくるのです。このアドヴェントの時期になりますとヨーロッパでは太陽がほとんど地平線上に近づいてしまって、一日のうち明るい時間は非常に少な

くなっていきます。斜めの乏しい光が凍りついたような野山や町に弱々しい陰を落とします。そんな季節に人々の心の中にアドヴェントクランツのろうそくがぽっと灯りを灯すのです。

日本ではクリスマスは12月25日だけです。25日の夕方にはクリスマスケーキは値下げされ、夜6時にもなりますとサッとクリスマスの飾りは片付けられ、あっという間にお正月の準備に入り、次の朝には立派な門松が立てられているものですが、ドイツを始めとしてキリスト教を信じている人の多い国々ではクリスマスは1月6日までです。12月24日のお昼頃からクリスマスツリーの飾り付けをして——モミの木はたいてい切らないで根っこから大きなバケツか何かに立て、終わったらまた大地に返してやるそうです——夕方になると、ある教会の鐘が鳴り始めます。するとそれに応えるように他の教会でも鳴り始めます。そしてだんだんそれが増えていってあちらの教会からは低い音、こちらの教会からは高い音、素朴な音、高貴な音で鐘が唱和していきます。やがて夜になると、家も、町も、野も、森も、人も、人の心も、何もかも全部が鐘の音に包まれて真夜中になり、…イエス・キリストの誕生日、クリスマスのお祝いの夜は更けていきます。

夜になると家中の人々が一部屋に集まり、もう教会の礼拝には行かなくなった人々も、みんなで賛美歌を歌い、信仰の深い家であれば、代々その家に伝えられた聖書を持ち出し、お父さんがクリスマスの出来事の書いてある部分を読み、クリスマスの食卓につくのです。クリスマスツリーの根っこのところにはプレゼントが置いてあるかもしれません。国によって習慣は違うようでして、スウェーデンでは子どもたちの寝ている部屋の前に白樺の枝を置いて、そこにプレゼントを置きます。オランダでは子どもたちのベッドに長い靴下をぶらさげてそのなかにプレゼントが入るのです。日本ではどうでしょう。日本ではクリスマスといえばケーキ、またはプレゼントということのみがひとり歩きしているような気がします。日本の子どもはクリスマスという日はクリスマスケーキを食べて、クリスマスプレゼントを貰う日としか考えてないようです。

ひとつ我々日本人があまり知らないクリスマスの習慣をお教えしましょう。12月24日の夕方、いっぱいのお花とろうそく、また小さいクリスマスツリーを持って親族や親しい人のお墓にいきます。それは祖先崇拝ではなく、死んでしまった人々とも一緒にクリスマスを祝おうという意味があるのです。ですから墓地はたいてい教会の裏庭などにありますが、いつもは暗いお墓が時ならぬいっぱいの花々に飾られ、ろうそくが灯されます。それはそれはきれいです。

♪

テューリンゲンの森のある町でのクリスマスのお話をしましょう。バッハやルターが住んでおりましたテューリンゲン地方、このテューリンゲンの森は「ドイツの緑の心臓」と呼ばれる深ぁーい森ですが———ドイツには深い大きな森がありまして、他に「黒い森」と呼ばれる森もあります。それは南北の長さ160km東西が60kmもある森です。黒いというのはモミの木が多いので遠くから見ると黒く見えて、森の中に入ってもなんとなく暗いからです。

時は16世紀、季節はアドヴェント、クリスマスの前の日です。ひとりの男が妻にこう言いました。「明日はクリスマスがやってくる。でもまた今年も子どもたちへのプレゼントを用意するお金の余裕はなかったね」と。妻は「そうね、でもあの素敵なプレゼントがあるじゃありませんか、それに私が美味しいご馳走を作るわ」と微笑んで言いました。ドイツのご馳走というとじゃがいもとビールを想像なさるかもしれませんが、その頃ドイツにはまだじゃがいもはありませんでした。じゃがいもは南米から伝わったもので、ドイツ、ポーランド、ロシアなどでたくさんの人々を飢えから救ったすばらしい食べ物ですが———。その頃はパンを崩してひき肉と混ぜて作った肉団子をスープのなかにひとり一個ずつボトンと落としたもの、それにできれば塩茹での川魚か鳥の肉がクリスマスのご馳走でした。

その家には子どもがたくさんいました。そのうえ居候がいましたから食卓はにぎやかでした。そして居間にはお父さんが立てて飾ったモミの木があったでしょう。

お母さんの肉団子スープをいただく前に居間のモミの木のまわりに集まった子どもたち居候たちにお父さんが言いました。「おまえたち、今年のクリスマスプレゼントはこれだよ」。そう言ってお父さんとお母さんは歌い始めました。それはお父さんが詞を書き、曲を付けできあがった長い歌でした。一番だけ歌います。

Vom Himmel hoch, da komm ich her,
ich bring euch gute neue Mär;
der guten Mär bring ich so viel,
davon ich singn und sagen will.

ご存知の方も多いでしょう。日本の讃美歌では101番「いずこの家にもめでたきおとずれ…」という歌詞で歌われています。居合わせた子どもたちはお父さんとお母さんの歌を聞いてクリスマスに救い主キリストが与えられるというほんとうの幸せをプレゼントとして受け取ったことでしょう。

それが終わって食堂に移り食卓を囲みます。熱々の大きな肉団子を一つずつドンとスープ皿に入れてもらいます。ところが最後に自分のお皿に入れようとしたお母さんは「アッ」と息を呑みました。ひとつ足らないのです。するとそれを見ていたまだ幼さを残した長男が「お母さん、ボクおなか空いてないよ」と言ったのです。育ち盛りのその子がおなかが空いていないわけはないのです。もちろん病気でもありません。肉団子を配っていた母親が最後になって自分の分がないのをみて、その子はそう言って自分のお皿を母親のほうに押しやったのです。母親はその子の思いやりに目が熱くなって「じゃあ半分ずつにしましょう」と言いました。

この一家のお父さんこそマルティン・ルターです。ルターの家の1535年の12月24日のできごとでした。

♪

このルターの讃美歌、さきほど歌いましたVom Himmel hoch…の歌を借りましてヨハン・ゼバスティアン・バッハがオルガンのための素晴らしいカノン風変奏曲を書いています。そのほかにもこれを主題にしたオルガン曲を書いていますし、クリスマスオラトリオにもこの曲は出てきますね。

私はこの講演の最初のところで、バッハはアイゼナハの職人音楽家の一族に生まれたと言いましたが、そのころの音楽家は職人でした。ですからバッハ家の人々も音楽の職人をしていたわけです。私どもは職人というと少し違ったイメージをもつかもしれません。確かに音楽家は職人のイメージからは遠いような気がしますが、音楽こそ職人、マイスターの心意気が必要でした。

バッハはルターと同じテューリンゲン地方に育ち、その考えを理解し、またその信仰を継承した音楽を作り演奏した音楽家でした。バッハは何のために音楽をするのか、何のために音楽を作るのか、何のために演奏するのかをいつも考えていました。さきほど言いましたようにバッハは職人でした。芸術家なら気の向いた時に作ればいいのかもしれませんが、職人ですから好むと好まざるとにかかわらずいつも作曲しなければなりませんでした。たとえば彼が生涯を閉じることになるライプチヒにいた27年間、毎日曜日の礼拝のためにいわば新作のカンタータを作曲し、演奏しなければなりませんでした。その他に受難節やイースター、クリスマスにも事あるごとに作曲し、演奏するという義務がありました。これはたいへんなことです。ひとつのカンタータは１曲ではなく、オーケストラと合唱、独唱のための数曲からできています。そのカンタータは200くらい残っていますが、もっとたくさんのカンタータがあったことでしょう。バッハは隣の部屋でオーケストラの人や合唱の人を待たせて、家族や年長の学生に手伝わせてパート譜を作り、できたところから楽譜をわたして演奏させたといわれています。現代と違ってそれらの楽譜の管理などは重要に考えませんでしたから、多くは散らばってしまい、いまでも時々、た

とえばハレ大学などの図書館からバッハの作品ではないかという曲がでてきます。オルガンの曲などは即興で作曲されたものも多いので、いま存在する何倍も何十倍もの曲が作られたはずです。

確かに芸術というのは天分がなければできません。しかしこれに職人の要素が加わるというのはその天分にプラスして毎日毎日の努力があって初めて実を結ぶのです。バッハもそうでした。

フランスの彫刻家オーギュスト・ロダンもそう言っています。ロダンのところにドイツの詩人ライナー・マリア・リルケがベルリンから汽車に乗ってパリに出かけていき修業を申し出ます。なんでまたドイツの詩人がフランスの彫刻家のところに勉強に行ったかと思いますが、彼は「ロダン先生は“真実なもの”を宇宙から刻みとって人間の手で造っている。自分は言葉でものを造りたい」と考えて彫刻家のところに教えを請いに行ったのです。ロダンは自分が造ったばかりの「手」という作品をみせます。そして「芸術とは毎日毎日仕事をすることだ、インスピレーションではないのだ」と教えます。そしてロダンはドイツからやってきたこの語学の達者な青年を自分の特別秘書にして大切な仕事をさせます。

バッハは偉大な芸術家であったのですがそれにも増して偉大な職人であったのです。私が次にお話しようしているモーツァルトは天才という部分が大きく評され、いつもササッと作曲できたように思われてきました。しかし最近の研究の結果、彼も苦心して推敲したということが、自筆の楽譜からその跡が読み取れます。彼もまた芸術家であり職人であったのです。

♪

話をモーツァルトに進ませましょう。ウォルフガング・アマデーウス・モーツァルトは1756年ドイツの南の方、ザルツブルクに生まれました。昔、ドイツが神聖ローマ帝国といわれた頃がありました。それはだいたい360ほどの小さな国の集まりでしてそのなかにローマ教皇が特別に司教を派遣する、または指名をする大

司教領という領地がありました。教会領です。マインツとかフルダとかの教会領のひとつがザルツブルクでした。ザルツブルクはこよなく美しい町です。すばらしいお城もあります。ザルツは日本語で塩です。「お塩」なのですよ。私が好きな理由がお分かりでしょう？ここは昔から岩塩が採れたのです。今でも採れます。地底から塩を掘り出しましてヨーロッパ中に輸出をしていました。それを運ぶのに人間が背中に担いだり、馬に乗せるよりも水路を船で運んだほうが効率がよいということで町の中を流れる川——アッハ、ラテン語のアクア、水、流れ、からきているのですが——ただアッハという名前であったのが塩を運ぶ水路ザルツァッハ川と呼ばれるようになりました。ブルクは砦という意味で、この川のほとりにできた町をザルツブルクというようになったのです。

この町の大聖堂で大司教領に仕えた音楽家レーオポルト・モーツァルトの子どもとしてウォルフガング・アマデーウス・モーツァルトは誕生します。四歳年上のお姉さん、ナンナールが七歳のときお父さんは彼女がクラヴィア——現代のピアノの前身といってもいいでしょう——を弾くために音楽の練習帳を作りました。そこには彼が信仰していたカトリックの音楽だけでなく、多種多様な曲が入っていました。その中にはもちろん作曲家であるレーオポルト自身の作品も入っていました。

ここから考えられるようにレーオポルト・モーツァルトが偉いのは自分の信仰、カトリックの音楽に固執しなかったことです。ザルツブルクはカトリックの町です。モーツァルトの一家もまたカトリック信者でした。カトリックとプロテスタントでは音楽の考え方が全く違っていました。カトリックでは基本的には音楽は一般会衆のものではありませんでした。司祭や特別な人で作る聖歌隊だけが歌を歌っていました。もちろん現代では違いますよ。一方、北方プロテスタント教会では「万人祭司」ですから、会衆も歌いました。それがコラールです。そのコラール、また対位法の音楽

をもナンナールの音楽練習帳に書き込んだのです。

♪

こんなお話をすると私には思い出されることがあります。ドイツにいましたある年の暮れ、1960年代の初め、ド・ゴール将軍が大統領であった頃です。私はクリスマスをパリで過ごそうと出かけました。24日の晩はドイツでクリスマスイブをお祝いし、25日車をとばしてパリに行ったのです。とても寒い冬でドイツではライン川もマイン川もガチガチに凍っていましたしパリではセーヌ川が凍っていました。川の上を学生たちが滑って遊んでいるのを見て、なるほど375年「みんなでｇｏの年」にゲルマン民族が大挙ライン川を渡ったというのはこういうことかと認識しました。

さきほど言いましたようにヨーロッパのクリスマスは１月６日まで続きます。なかでも12月31日、大晦日は特別なのです。クリスマスが宗教的で“静”としたら、大晦日は大衆的で“動”でしょうか。私はモンマルトルの丘の上、サクレクールの聖堂、これもユトリロの絵などでご存じでしょうか真っ白な丸いドームです――に行きました。カトリックでは真夜中にミサがあります。正直言ってカトリックのミサのほうがきれいです、素敵です。プロテスタントの礼拝はクソマジメ！ごめんなさい！

サクレクールの聖堂に着いたのは深夜少し前11時半ころでしたが、着いてビックリ、超満員です。着飾ったマダム、マドモアゼル、ムッシュ、おまわりさんもパン屋のおじさんも洒落たベレー帽の兵隊さんも…パリ中の人、全部集まったようでした。大きな聖堂にギューギュー詰め、何千人いたでしょうか。まるで東京のＪＲ中央線の朝のラッシュ、それも着膨れた人ばかりの冬の朝のようでした。実はそのとき私は後で飲もうとスパークリングワインのビンを抱えていました。ミサが終わってからでは酒屋さんが閉まってしまうと思ったのです。ワインを抱えて教会に入ることに躊躇していたうえに、この超満員では…と考えて足を止めました。そして聖堂の裏庭の茂みの奥にそっとビンを

隠したのです。こうしておけばミサが終わるころにはほどよく冷えるだろうと思いました。そしてもう一度、聖堂の入り口からわずかの隙間を見つけて身体をすべりこませました。

やがて鐘が鳴りはじめました。日本の鐘の音は単旋律と言いましょうか、ゴォ～ンと鳴ってそれが山の方に消えていく、するとまた同じ調子でゴォ～ンと次の音が鳴る…という具合ですね。あちらの鐘の音はひとつの音が鳴るとそれが消えないうちにかぶるように別の音が鳴ります。鐘は複数あるのです。それが鳴り始めますと私たちの気持ちも昂ぶってきます。鐘の音はすっぽりとパリの町を包んでしまいます。

――さあミサがはじまります。真っ白な服を着た司祭がひとりだけ出てきて歌い始めます「Adeste fideles…」と一節を歌います。日本の讃美歌では111番、「神のみ子は今宵しも」です。二節に入ると会衆も唱和して、何千人の会衆がワァーと歌うのです。歌いだしてそれから大オルガンが入ってきます。それがぴったり合っていたのには驚きました。私はもうすっかりうれしくなってしまいました。私の知っている数少ないラテン語の歌ですから私は夢中で大声で歌いました。歌いだしてフッと気がつきました。何千人も歌っているのですが斉唱なのです。誰一人違う旋律は歌っていません。誰もアルトやテナーやバスの旋律を歌っていないのです。ハーモニーがないのです。そこで私は「ははー、フランス人ってのは非音楽的なんだ」と思ったのです。フランス人は視覚的です。ですから「絵画や彫刻はすばらしいけれど、音楽はちょっとなぁ」と思ったのです。せっかくのすばらしい音楽にハーモニーを付けないなんてもったいない。そこで私はひとりでバスの旋律を歌い始めました。当時は私も若くて今よりずっと声量もありました。そのうえ威張って歌うものですから相当の音量だったと思います。すると周囲のかわいいマドモアゼルも素敵なマダムもおまわりさんらしい人も兵隊さんも振り向いてニコッとかフフッとか笑うのです。私も会釈を返しながら、なにしろ相

手は三千人ですから、3000対１、堂々と日本男児ここに在りという感じで歌い切りました。ミサが終わって聖堂の外に出ます。身を切るような寒さです。さきほど隠したワインを取りに行きますと具合良く冷えています。でもそれを取り出す時、おまわりさんに見つかって、日本人が何かビンをもっている、過激派が火炎瓶を持っているのではないかと疑われたりしました。ワインだと言っても信じてもらえないのです。ワインなら開けてみろと言われても、スパークリングワインですから…信じてもらうのにずいぶん時間がかかりました。そのあとは誰彼かまわず「新年おめでとう！」といって肩をたたきあいキスしあいます。私もずいぶんかわいいマドモアゼルからほっぺにキスされました。「ふふふ、あの歌のせいだな――ボクって結構上手だったンだぁ」とにんまりしていました。そしてその若者たちに誘われ、朝までどんちゃん騒ぎです。

そして朝になって哲学者森有正先生をノートルダムの下宿に訪ねました。「元旦の朝行きます」と約束してあったのです。森先生はご存じの方も多いと思いますが、昔、森有礼という文部大臣がいました。その息子が森明という牧師でそのまた息子が森有正です。東大の助教授の時にパリにいったままずっと居続け、とうとうパリで亡くなった非常に優秀な哲学者でした。先生の下宿に行ってその前の晩からのサクレクールでのできごとを話しました。先生はキリスト教信徒ですから「深夜ミサはほんとうに素ッ晴らしかったです」と言う私に「うん、そうでしょ」と肯いておられましたが、私が「でも残念だなあ、フランスはあまり音楽的な国じゃないですね、ドイツだったらもっと…」と私が3000対１でバスの旋律を歌ってハーモニーを付けた話をしました。すると先生は「えっ？」と非常にびっくりされて「小塩さん、ほんとにやったんですか？」とおっしゃるのです。私は威張って「ええやりましたよ」と答えました。先生はまじまじと私を見て「ほんとに？」と繰り返して、しばらくだまった後、声を落としておっしゃいました「…あなた、たいへんなことをしましたねぇ…」。私は何のことかわかりません。先生は「千数百年来カトリック教会には教会法という法律があるのです。ローマ法とゲルマン法とならんで教会法もまだ有効なのです。その教会法によれば、ミサにおいて会衆の讃美歌は斉唱で歌わなければならないと書いてあるのです。合唱で歌うのは聖歌隊だけなのです。あなたはその法を犯したのです。もう破門です」と恐い顔をしておっしゃるのです。破門といわれても私はカトリック信徒じゃないし…と思っていたら、先生は悲しそうに「あなたはもう天国には行けません。地獄か煉獄か、煉獄で努力すれば這い上がれるかなあ、ああかわいそうだ、教えておいてあげればよかった…」と真剣におっしゃるのです。

ヨーロッパでも国によって地方によって教会によって賛美の仕方は違うのです。イギリスでは南のほうはイギリス国教会、聖公会ですね、北は長老派プロテスタントですが、両方とも賑やかなのですよ。楽器を鳴らし、手振り身振りも合わせて、寒いクリスマスの時期でも上着を脱いで、立ち上がって歌いまくるのです。ドイツでは讃美歌は座って歌います。ところが聖書の朗読は立って聞きます。日本では反対ですね。聖書を読まれるときはその箇所を各自も聖書を開いて読みますね。そのためには座っていなくてはやりにくいわけです。ところがドイツでは聖書は“聞く”ものなのです。彼らは視覚的ではなく聴覚的な民族ですし、小さい時から聞くことで慣れ親しんできたからでしょう。日本人は書いてあるものを読んで理解します。だから名刺が有用なのです。確かに「おしおたかし」と耳で聞いてもよく分かりませんね。「どう書くのですか」と尋ねられたこともあります。字を目で確かめて理解する国民です。

♪

ちょっと話がそれ過ぎてしまいました。モーツァルトに戻しましょう。七歳のお姉さんナンナールがクラヴィアを弾くと三歳のウォルフガング坊やはじっと傍で聴いていました。そして小さい手を鍵盤の上に置き、

三度の和音をさぐり出していつまでもその音に聞き惚れていたそうです。ナンナールが後年そう書き記しています。彼女は素晴らしい演奏家でした。お父さんのレーオポルトはナンナールとウォルフガングを演奏旅行に連れていき、ふたりは喝采を浴びました。しかしナンナールは大きくなって結婚してからは音楽の一線からは遠のいてしまいました。

才能ある女性が結婚のために芽を摘まれることはよくありますね。作曲家シューマンの妻クラーラ・シューマンもそうでした。結婚前はモーツァルトの再来と言われた作曲の腕も演奏の腕も夫ゆえに折ることになります。夫ローベルト・シューマンは妻が演奏旅行に行くのをいやがりました。子どもが次々生まれたこともありますが、結婚後、彼女が演奏旅行に行ったのはたった三度だけでした。その二度目、オランダに行ったのはローベルトの病気の治療費を得るためでした。夫が家に居る間は作曲の邪魔になるからとピアノを弾くことさえできなかったようです。

ナンナールは音楽の道から遠ざかりますが、弟ウォルフガングは、言わずと知れたモーツァルトのことですが、音楽を続けました。モーツァルトが小さい時は彼がクラヴィアを弾くことによって作曲した曲をお父さんが書き留めました。それらを含めて彼の全作品を集めて整理した人がルートヴィヒ・フォン・ケッヘルです。ケッヘルはモーツァルトの作品にナンバーを付けました。それがK331とかK620などというケッヘル番号です。これは新しい研究によって少しは違うこともありますが、だいたいは作曲年代順です。ケッヘルによって1番をつけられた作品は彼が5歳のときのものです。K1のかわいい曲は私も小さい時練習させられました。私もピアニストになればよかったかなと思うこともありますが、もしピアニストになっていたら指が太すぎて黒鍵の狭いところに指が入ったら抜けなくなっちゃうので止めてよかったのでしょう。私がモーツァルトのソナタなどを勉強している時、先生がくれたのがこのK1でした。たかが五歳の子どもの作ったもの「へっ、なんでもないよ、簡単さ、」とやってみたものの、それが難しい！何とも難しいのです。それで私は絶望いたしましてピアノをやめたのです。——というとかっこいいのですが、ホントのことをいうと遊びたかったし「ピアノなんて男のするモノじゃないッ」と思ったし、何より後からピアノの勉強をはじめた二歳下の妹に追い越されたのが一番の理由でした。そのくせ、その後、妹の弾くショパンなどが羨ましく思ったし、ピアノを薦めるおばあちゃんには「中学の受験があるから」と嘘をついたことを悔やみました。そのとき子ども心に「こんな嘘をついてボクは嘘つきの人生を歩いて詐欺師にでもなるのかな？」と不安でした。不安は当たりました。

私はかつてＮＨＫテレビのドイツ語講座の講師を18年間しました。18年間テレビカメラの前で「…ドイツ語って楽しいですよね」とか「しっかりテレビで勉強すればできるようになります」と言い続けました。嘘です！ラジオはちょっと違いますが、テレビの語学番組にできることは、勉強してできるようになったら楽しいだろうなと思わせるだけです。ドイツ語で買い物ができたらいいなとかイタリアでレストランに行けたらいいなとか思わせるだけのメディアです。本当の勉強は自分でしなくてはなりません。テレビを見ているだけでは決してできるようにはならないのです。それを分かっていながら18年間みなさんを騙し続けました。ほとんど詐欺師です。

♪

私にとって苦い苦い思い出になってしまいましたＫ１！あの時おばあちゃんが私の嘘を見抜いて叱ってくれればあんな嘘はつかないですんだし、ひいてはテレビカメラの前で18年間詐欺師のようなことも言わないですんだのに…と相変わらず人のせいにしていますが。

あのK1の中のK1cと番号をつけられたアレグロ…実はもう一度登場するのです。

モーツァルトのわずか36年の生涯の最後の年、その年は悲惨でした。病魔が彼を襲いました。わけのわか

らない経済的な苦しみがありました。子どもも亡くしました。しかし音楽的にはほんとうに実り豊かな年になるのです。春に素晴らしいピアノ協奏曲を書きます。そしてすぐそのなかのひとつのメロディーを使って歌曲『春へのあこがれ』を書きます。それからオペラ『魔笛』を作ります。それを書いている途中で『レークイエム』を書きます。ご存じのように灰色のマントを着た痩せた背の高い男が革の袋に入ったお金を持ってきて『死者のための鎮魂ミサ曲』を書いてくれと依頼したというのです。死神からの依頼と感じたモーツァルトは『魔笛』をそのままにして『レークイエム』の作曲を始めます。でもそれは結局、未完成のまま彼は死へ旅立ちますので弟子のズュースマイアが後を完成させることになるのですが。九月になりますと『皇帝ティトスの慈悲』というオペラセリアを書いて上演し、九月末『魔笛』を完成させ大成功をおさめたのですが、その時、病は重く、11月20日ついに倒れます。そして12月5日午前0時55分に息を引き取るのです。

そのときモーツァルトは『レークイエム』の一節を口ずさみますが、もうひとつ、ある旋律を口のなかで歌いました。それは『魔笛』の中の鳥刺しパパゲーノのアリア「恋人か女房があれば」です。これを口ずさんでぽろっと涙を落とし息絶えます。そのメロディーこそ、さきほど言いました彼が五歳のとき生涯で初めて作曲したK1cのアレグロのメロディーです。モーツァルトはこのメロディーを一生涯かけて守り『魔笛』において素晴らしく花開かせ、そして死の床で口ずさみながら世を去っていきました。

バッハは天に向かって精神の結晶を煉瓦のように積み上げた作曲家だと言うならば、モーツァルトは短い生涯、涙と笑いが駆け抜けて行ったと言ってもいいでしょう。モーツァルトは自分の生涯の初めてのメロディーを最後の傑作のなかにすべての生涯を結晶させて再現したのです。つまり彼のなかには生涯あのメロディーが流れていたのです。音楽家にはそれぞれの魂の原形のような旋律があるのです。それは拡大され、ぶ

つかり、変化し、飛躍し、花開き、散り、縮小され、また飛翔し…でも原形は変わらないのです。

♪

モーツァルトを愛したドイツの詩人ヨハン・ウォルフガング・フォン・ゲーテのお話をしましょう。ゲーテの詩は「野ばら」「君よ知るや南の国」あるいは「魔王」でよく知られていますね。あのゲーテが生涯の最後の日、1832年３月22日ですが、そのお昼頃ワイマルの自分の家の南側の部屋の肘掛け椅子で膝に毛布を掛け亡くなりました。その時言ったという有名な言葉が「もっと光を」ですね。そう言ったと伝えられています。これをドイツ人は屁理屈が好きですからひねくりまわすわけです。たとえば「もっと光を」というのは倫理的な問題である、世の中が暗くなっているから光をと言ったのだ、いや、宇宙にまで届く光を、などと「もっと光を」を論じた論文だけで100以上あるのですよ。

でも私はそんな立派なことではなかったのだと思うのです。ゲーテも歳をとったのでバッハと同じようにたぶん白内障で見にくくなっていたのです。だからもっと明るくしてくれと言ったのではないかと思うのです。

ゲーテは生涯四回ほど死線をさまよったのに結局長生きだったのです。「もっと光を」と言ったのは82歳です。82歳の春浅い頃、彼は風邪を引いたのですが「風邪なんかふっ飛ばしちゃえ」と寒い風のなか馬に乗って野山を走り回ったのです。彼は歩く時はよく鉄の杖を持って岩を叩きながら歩いたそうです。ちょっと変った不気味な老人ですね。もっとも岩を叩いていたというのは彼はワイマル国の大臣でもありましたから、そのかけらを持ってきて成分を研究し、貧乏なワイマル国の財政に何か助けにならないかと考えていたのです。その日も「岩叩き」にすればよかったのに、風邪を引いていたために？馬にまたがってふっとばす方を選んだのです。結局、肺炎を起こし、肺に水がたまりました。朝、起きて、医者が「まぶしいから」と窓のブラインドを閉めました。するとゲーテはエッカーマンという秘書と息子のお嫁さんに「ちょっと暗いなあ、

もっと光を」と言っただけなのです。ただそれだけのことなのです。

しかしそれからが大事なのです。お嫁さんのオッティーリエに「手を」とせがみ、手を握ってもらい「あたたかい手だね」と言ってそれからその手を離し、指で虚空に何か書きました。そして指先で押すようなしぐさをしました。何だろうと思ってエッカーマンとオッティーリエはゲーテの後ろに回りました。見ると膝に掛けた毛布の上に指先で何かを書いています。それはW――ダブリュウの大文字でした。そしてピリオドをうったのです。

さあ、それが記録に残ったためにまた論文がどっさり書かれました。Wは世界という単語の頭文字だ、世界平和を論じたのだ、いや世界文学だという人もいます。また、価値という単語もWではじまりますから人生の価値について論じたのだという人もいます。

私はそうではないと思います。大文字で書いてピリオドをうつというのは名前です。イニシャルです。彼の名前はヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテでした。ヴォルフガング・アマデーウス・モーツァルト…彼はいつもモーツァルトと同じ名前だということを喜んでいました。もちろん名前と言うものは自分で付けたのではありません。彼は親のつけたその名前に一生かけて近づいていくのだと82年かけて努力しました。そしてモーツァルトと同じように純粋で喜びに満ちた文学を作り、その生涯最後のときにあたって、その名前をいとおしみW．と書いたのです。

♪

私は凡俗ですから彼らのように人生を輪として生きられないだろうと思います。たぶん生きっぱなして死んでいくでしょう。でもモーツァルトやゲーテは優れた作品を作ったばかりでなく自分の人生を自分の責任で生き抜いてひとつの輪を閉じあげて終えたと思うのです。そしてその人生そのものが作品です。そしてその作品はとてつもなく偉大です。

今日の講演のテーマは「バッハとモーツァルトは何のために音楽を作ったか」です。つまり「芸術は何のためにあるか」です。現代の芸人たちは「どうやったらうまくいくだろう」、「どうしたらうけるか」、「どうしたらもうかるか」と考えて製作しています。英語では「ＨＯＷ」です。でもバッハやモーツァルトの音楽を聴き、その生涯をじっと見詰めていると「ＨＯＷ」ではないことがひしひしと分かってきます。

バッハは作曲した楽譜にその目的を「最高のお方を賛美し、隣人の心を励ますために」と書きました。また「創造主を賛美し、人類の精神を再創造すること」と書きました。これが彼の作曲の、演奏の、また人生の目的であったのです。ロ短調ミサ曲の最後にはD.S.G.とサインがあります。これはDeo soli Gloria「ただ神の栄光のために」というラテン語の頭文字です。彼は作曲した宗教音楽にかぎらず、世俗音楽を含めた主要な曲の五線紙にこれらの言葉を書いています。

彼らは「どんな風に」ではなく「なぜ」「何のために」を問い続けて生き、音楽を作りました。そしてバッハは生涯の最期は白内障になり、二度の手術の後、ほとんど見えなくなりました。モーツァルトはわけのわからない経済的な苦しみに襲われます。病魔にも苦しめられました。しかし生涯をかけて職人気質で音楽を作り続けたのです。そこには「なぜ」「何のために」という目的があったからあの感動的な天と地にひびく音楽を作り上げることができたのです。ですからこそその音楽は200年を経て今も我々の心を打ち続けるのです。

2003年11月12日(水)　名古屋学院大学シティーカレッジ2003　特別講座「天と地のひびき」
講師　小塩　節

チャペルブックレットNo.11

2004年4月1日発行

編集・発行　名古屋学院大学　宗教部
〒480-1298
瀬戸市上品野町1350
TEL 0561-42-0348

印　　刷　東洋印刷工業株式会社